

開催地名	大阪府 貝塚市
開催日時	令和7年2月9日(日)10:30～12:00
開催場所	貝塚市役所福祉センター6階 多目的ホール
語り部	松井 憲(広島県広島市安佐南区)
参加者	貝塚市自主防災組織 54人
開催経緯	本市では、住民の災害に対する自助・共助の重要性について意識が低く、防災訓練等への参加率が上がらないという課題がある。そこで被災地からの実体験を交えた講話について、被災地での活動等実体験の話を直接聞く機会を設け、住民の危機意識の向上を図りたい。
内容	■ 自己紹介 本講演の講師は、平成26年8月20日に発生した広島豪雨土砂災害の被災者であり、当時は自治会の副会長として地域の防災活動に従事していた。自身も被災しながら、地域のために捜索活動や復旧活動に携わった経験を持つ。令和5年9月には広島市豪雨災害伝承館の副館長に就任し、防災に関する展示の説明や防災教育を行いながら、災害の記憶を後世に伝える活動を続けている。 ■ あの日のこと 広島市豪雨災害伝承館で流されている映像によると、8月19日夜から20日明け方にかけて、1時間に87ミリ、24時間で247ミリの降水量を記録し、観測史上最大の集中豪雨が発生した。この豪雨により、安佐南区及び安佐北区では大規模な土石流が発生し、甚大な被害をもたらした。消防、警察、自衛隊による懸命な救助活動が昼夜を問わず行われたが、建物被害は全壊179棟、半壊217棟を含め計4749棟に及び、死者は災害関連死3名を含む合計77名、負傷者は69名に上った。 被災者の証言によれば、0時半頃にはバケツをひっくり返したような雨が降り始め、屋根を打つ激しい雨音で目を覚ましたという。床下収納の中のもの浮き上がるほどの水圧がかかり、車の警笛やハザードランプが点滅する異常な状況に気付いた。2時頃には遠くで鈍い音が聞こえ、外を見ると、母屋と離れの通路を大量の水が川のように流れていた。 多くの住民が「自宅が流されるのではないか」という恐怖を感じながらも、状況が暗闇で把握できず、避難の決断が遅れた。さらに、泥の匂いが立ち込める異常な環境の中で、被害の深刻さを理解するまでに時間がかかったという。レスキュー隊の支援を受けながら、2階のベランダから救出される住民もいたが、リフォーム後も土砂に埋まる錯覚に陥るなど、心理的な影響が長く続いた人もいた。 また、語り部自身の体験として、家は山の斜面の終端に位置していた。0時半頃から雨が降り始め、屋根に響く激しい音が続いた。朝方、妻に起こされると、普段聞こえるはずの鳥の鳴き声や新聞配達バイクの音が全く聞こえなかった。そして、周囲には異常なほど爽やかな木の香りが漂っていた。後に判明したのは、土砂崩れによって木が引きちぎられた際の香りだった。 救助を待つ間、ヘリコプターがなかなか到着せず、不安な時間が続いた。ようやく自衛隊の姿が見えた時には、「これで助かる」と安堵したという。しかし、玄関前には膝上まで土砂が積もっており、扉を押し開けるだけでも一苦労だった。 ■ その後のこと 家は山の斜面の終端にあったため、日を追うごとに土砂が溜まり、最終的には約1メートルもの厚さに達した。災害発生から10日後、ようやく自宅に戻ることができたが、その時点でも行方不明者の捜索が続いていた。家の前では、直径4メートルの巨大な岩の下に人が埋まっている可能性があったため、重機を使った岩の破碎や、土砂のふるい分け作業が昼夜を問わず行われていた。この作業は2週間続き、音が突然止まると「誰かが見つかったのではないかと緊張感が走る毎日だった。 災害後も、多くの被災者が精神的不安定に悩まされていた。例えば、工事の騒音を聞くと当時の記憶が蘇る人や、外に洗濯物を干すことができなくなった人もいた。また、インフラ整備に伴う立ち退きなどの影響で、自治体によっては住民の約1/3が転出し、地域のつながりが希薄化した。知り合いが減ることで高齢者の孤立が進み、話す機会が減ったことで認知症の症状が進行するケースも見られた。物理的なインフラ復旧は進んだものの、被災者の心の復興は依然と

	して課題となっていた。これを受け、学区単位でのコミュニティ活動を定期的に行い、住民同士の交流を促進する取り組みが始まった。 ■ まとめ 自然災害は予測不可能であり、「自分が被災する」とは誰も思っていない。そのため、避難訓練を実施しても参加者が少ないのが現状である。 〈住民の課題〉 ・自然現象と災害の区別がつかない ・何が危険なのかを知らず、具体的な対策を講じる意識が低い ・自身の危険認識と、行政が発表する避難警戒レベルのギャップがある ・「自分は大丈夫」という正常性バイアスが強く働き、避難をためらう 〈行政の課題〉 ・防災リーダーへの情報提供が不十分である ・職員向けの防災教育や、被災者支援に関する研修が不足している ・実施した施策の効果を適切に検証していない 被災後の心のケアの重要性も見逃せない。PTSDなどの精神的影響に長年悩まされる人も多いため、地域住民が協力し合い、定期的にサロンや茶話会を開くことで、コミュニケーションの機会を確保することが求められる。物理的な復興だけでなく、住民の心のケアを含めた総合的な支援が、真の意味での「復興」につながるのである。  
開催地より	実災害を体験している語り部の体験談から、自分たちのすべきことは何なのか、日頃から考えなければいけないと痛感しました。今後の啓発活動に活かしてまいります。